

## 「信州大学卒業生 谷垣雄三の軌跡」 ニジェールのドクター・タニとマダム・シズコ

### — 企画展について —

谷垣雄三・静子夫妻記念事業実行委員会

川 本 晴 夫 (実行委員会世話人)

山 形 茂 生 (実行委員会世話人)

安 城 康 平 (実行委員会世話人)

#### 1 章 谷垣夫妻展と反響

「妻・静子の作品展を日本で開いて欲しい」という谷垣雄三の“遺書”に触れたのを契機に、信州大学ワンダーフォーゲル部草創期で共に活動した仲間から、支援の輪が広がり企画展が開催された。企画展は谷垣の西アフリカ・ニジェールでの医療活動と妻の絵画を併せて展示して各地で開催された。その結果、様々な反響や反応があった。それらを報告する。

#### 2 章 遺作から読み取れる国際保健医療協力の中での闘い

国際保健医療協力の視点から、谷垣は日本語で多くのことを語らなかった。彼のやりたかったこと、残したかったものは何か、「遺作」とりわけ英語とフランス語で残された実践的な「活動報告書」から、後のSDGsの目標の一つである「ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ (UHC) の達成」を先取りしていたと説く。

#### 3 章 谷垣雄三の軌跡に寄り添った絵画たち

夫の愛だけを頼りに松本からニジェールに渡り、ニジェールの自然と人を描き続け、語りかけるような絵の数々を残した静子。自身の亡き後も夫の活動を見守り、支え続けた絵画の数々。「妻・静子の作品展を日本で開いて欲しい」と言わしめた絵画から二人の同志としての絆を知る。

上記1章、2章、3章を各々、川本、山形、安城が執筆する。(以下、敬称略)

## 1章 谷垣夫妻展と反響

川本 晴夫

### 1-1. 手作り企画展

「静子の髪は私がとかしてあげました。黒く沢山の髪でした。  
白いズボンをはかせてあげました。  
顔は少しほほえんでいました。何度も何度も見て、なでてあげました。  
静かな顔でした」

西田正孝（昭和36年入学、医、故人）の妻、親子（ちかこ）から渡された谷垣雄三の“遺書”はこんな書き出して始まっていた。“遺書”は仙台に住む静子の10歳年下の妹夫妻に宛てたものだった。その後段に「静子の作品をまとめておきます。私が死んだら日本で静子の展覧会を開いてください」という旨の願いごとが書かれていた。

谷垣が亡くなった平成29年（2017年）7月、伊那市の「羽広荘」で行われた合宿で、親子から渡された“遺書”を読んで、みんなが谷垣の願いごとを知るきっかけとなった。

平成30年（2018年）3月7日、谷垣の一周忌に松本市の浅間温泉に信州大学ワンダーフォーゲル部OB会組織「波里美知会」の12人が集い、谷垣の霊を弔う「偲ぶ会」を開き、企画展を開くことを申し合わせた。翌日、松本市内で展示会場を探すと共に松本蟻ヶ崎高校同窓会を訪れ、寄贈の意志を伝えた。

すでに作品16点が日本に届いていた。現地での写真も入手していた。すべてが当時、JICA（国際協力機構）ニジェール支所長だった山形茂生（現・実行委員会世話人）から送られてきた。アフリカを愛してやまない山形がいなかったら、何も始まらなかっただろう。畑日出夫（昭和36年入学、医）は、文学部の跡地にある「あがたの森文化会館」と交渉したものの、良い返事がもらえず、玄関を出たところ、館長が追いかけてきて「詳しい話を聞かせてください」と声をかけられた。これがきっかけで、開催が実現したと聞く。

畑は、机も腰掛もなくなった元教室の展示会場を見つめ、衝立をどのように立て、どのように作品と写真パネルを飾るか、頭に描いた。衝立を運ぶ台車の格納場所を確認するなど、細かい設営作業の段取りを練った。設営作業は「波里美知会」の合宿として集まったワングル仲間で行うことにした。

松本市での信大附属病院に続いて開くことにした「あがたの森文化会館」での企画展の準備が始まった。

展示会場を確保すると併せて4人は伊那市にある畑家の茅葺きの旧家に泊まり込んで、写真パネル作りに分業で専念した。4人は昭和36年（1961年）に入学した畑、平英彰（農）、土田幸紀（同）、川本晴夫（文理）。



図 1-1 廊下に並んだ制作中の写真パネル

「信州大学卒業生 谷垣雄三の軌跡」ニジェールのドクター・タニとマダム・シズコ ー企画展についてー



図 1-2 作業の激励に訪れた藤巻夫妻（右端の2人）と土田（左端）、畑夫妻（後列左から2人目と前列の1人）

パネルは60センチ×90センチ。プリントしてパネルに貼り付けた。見出しや解説文章、写真説明も作成した。畑は保管、運搬のために、パネルを入れるダンボール箱を量販店で調達した。すべてが手作り。藤巻光夫（昭和33年入学、文理）・育子（織）夫妻らワンゲル仲間が応援に駆けつけてくれた。

この時の手作りパネルは大活躍した。松本での企画展のあと東京、横浜、さらに九州から名古屋、松本、それに谷垣が生まれ育った京都府京丹後市峰山町を経て最終回の信州大学へと、各企画展のどこの会場でも砂漠の匂いを失うことはなく夫妻の姿を伝えた。信大中央図書館での「谷垣雄三の軌跡」で見事に有終の美を飾った。

### 1-2. 「松医会」も展示に協力

その一方、畑は信大附属病院の外来通路（廊下）の両壁に展示ができることを知り、医学部同窓会「松医会」に相談した。「松医会」会長は、谷垣、畑と同期の勝山努だった。快く相談に応じてくれた。

企画展の主催を「松医会」にした結果、日程の調整もスムーズに進んだ。畑は「松医会」理事会に出席して、開催の目的、開催時期など、まとまっていた概要を説明し、開催が正式に決まった。畑、平、土田、川本の4人はスケールを手に展示する病院通路の壁の長さ、高さを測った。

「松医会」は額装店も紹介してくれた。その額装店は、額装ばかりか、作品の保管や運搬まで面倒を見てくれた。

### 1-3. 冬季縦走の勇気に期待

谷垣のニジェールでの医療活動は、すでに「松医会」の医師らに知られていた。

谷垣が医師になっても勤務病院が見つからなかった時、谷垣を迎え入れた埼玉県小川町の小川赤十字病院の当時の整形外科医・東暲（ひがし・あきら）（信大医学部第6回卒業）は「松医会報」（2007年4月30日付）に谷垣を紹介している。「大使館のない国で孤立無援の痛々しい闘いをしている」と。

谷垣が冬季裏銀座単独縦走を成し遂げたのはまさに小川赤十字病院勤務時代。東は「（ニジェールでの闘いを見るにつけ）縦走を成し遂げたことを思い出す」と、谷垣の闘いに期待を寄せた。

「（縦走に成功したのは）彼の緻密な計画性、並外れた体力と気力、そして勇気、強運があったからこそ。彼なら前人未踏のアフリカの仕事をやり遂げるだろうと思っています」

東は現地ニジェール・テッサワを訪れ、現地を見ている。

東の働きで横浜港北ロータリークラブ（RC）は谷垣を名誉会員として招き入れ、支援を続け

た。これが縁で、谷垣の死後、横浜港北RCと谷垣の出身地で活動する京丹後RCが姉妹契約を結び、「谷垣雄三医師夫妻顕彰展」が実現した。令和5年（2023年）5月27、28の両日、京都府京丹後市峰山町で開催され、郷土の偉人にスポットをあてた。

#### 1-4. 峰山からも病院会場に

話を病院通路で開いた最初の企画展に戻そう。

企画展名は「ニジェールの外科医・谷垣雄三を偲ぶ写真展&静子夫人の里帰り絵画展」＝平成30年（2018年）7月23日～8月3日＝。東、それに谷垣と同期で元信大附属病院長の清澤研道、谷垣が卒業した京都府京丹後市峰山町の峰山高校時代の同級生らが駆けつけた。

同級生たちは「谷垣雄三医師を支援する会」を組織し、早くから治療用の古新聞、タオル、資金の支援を行う一方、公園に「テッサワの丘」と名付け、そこに「友情の碑」を立て、桜の木を植えた。日本から1万2000円離れたニジェールに声援を送り続けた。



図 1-3 信大附属病院に駆けつけた峰山高校の同級生

#### 1-5. 遺作でつながる支援の絆

次の企画展設営作業は、千葉和夫（昭和33年入学、文理）三宅洪喜（昭和34年同、同）はじめ、「波里美知会」の多数の会員らが駆けつけた。

ヒマラヤ杉並木と旧講堂、旧本館が、文理キャンパスの記憶を蘇らせる。あがたの森文化会館展示会場は旧本館。谷垣を物心両面で支え続けたNPO「アジア・アフリカにおける医学教育支援機構」（OMEAAA）の理事長・熊谷義也が東京から足を運んでくれた。当時、JICAニジェール支所長だった山形は、テッサワの谷垣夫妻の自宅から、多数の絵画や写真アルバムを見つけ、日本に発送した。絵画の発送や到着後の面倒を見てくれたのが熊谷だった。熊谷はどの写真、絵画を見ても深い感慨に浸ったに違いない。熊谷は総合医としての谷垣の実力から判断し、谷垣を推薦し、アフリカに送った。

さらに当時、松本蟻ヶ崎高校同窓会の会長だった加藤実子も会場にきてくれた。「1点を寄贈したいので選んでほしい」と来場を機にお願いしていた。加藤は畑の案内で会場を一巡し、静子の遺作を丁寧に1点、1点見つめた。加藤は油彩画の大作が並ぶ前に立ち止まり、主催者の視線が集まる中、「本を読む少女」を指差した。加藤の左脇に熊谷、右脇に畑が立っていた。

熊谷の事務所には、谷垣が持参した静子の遺作「子守歌」「安息の旅へ」の2点が大切に保管されている。

「信州大学卒業生 谷垣雄三の軌跡」ニジェールのドクター・タニとマダム・シズコ ー企画展についてー

「本を読む少女」は同窓会館で開かれた「谷垣静子遺作展～サハラ砂漠から故郷・松本～」＝平成31年（2019年）9月19～30日＝の会場で、山形から加藤に贈られた。

このように静子の遺作は谷垣支援の絆を強め、またこれらの遺作は静子が谷垣を支えたように企画展を支えてくれ、異国の環境と人々をいきいきと想像させ、二人の生きた様を思い起こさせる語り部にもなってくれた。

#### 1-6. 「実行委」が発足、広く展示へ

平成31年（2019年）11月、「波里美知会」に山形、それに青年海外協力隊調整員としてニアメに駐在し、谷垣夫妻と交流があった安城康平が加わって「谷垣雄三・静子夫妻記念事業実行委員会」（以降、「実行委」と表記）が発足し、谷垣夫妻企画展の全国行脚が始まった。

「実行委」の目的はこうだ。

「故谷垣雄三医師のニジェールにおける外科医育成と地方外科改善のための活動、および故静子夫人のニジェールでの作画活動を、展示会等を通じ顕彰する」

ひらたく言えば、展示会を開催し、アフリカを舞台にした二人の活動を多くの人に知ってもらおうというもの。このため、展示会タイトルは「ニジェールの外科医 谷垣雄三・静子夫妻を知る企画展」とし、開催場所は「全国各地」と、規約に盛り込んだ。

役員は以下の通り。▽会長＝川本晴夫▽副会長＝土田幸紀▽事務局長＝山形茂生▽広報担当＝安城康平（後に全役員を実行委員会世話人と改める。）

#### 1-7. ニジェール情報、次々と

山形は、絵画や写真のほかに貴重な情報もニジェールから、「波里美知会」にもたらしてくれた。例えば、静子が展覧会を現地で開いたらしいが、いつ、どこで開いたかはわからなかった。山形に尋ねると、ズバリ、そのポスターまで送ってくれた。そればかりか展示会場のビデオも。

ビデオは青年海外協力隊調整員だった安城が制作し、自ら静子にインタビューしていた。静子の肉声までが耳に飛び込んできたのには、驚きのほかはなかった。

早速、安城は作品の絵はがきも作成した。

二人の働きで、各地のJICA施設での開催がコロナ禍に悩まされながらも進んだ。主催はJICAアフリカ部、共催は「実行委」。

JICA横浜では3回も催された。

JICA施設で開催された企画展は以下の通り。

- ▽ 東京・市ヶ谷 令和2年（2020年）7月2日～8月2日
- ▽ 横浜市                   "                   9月1～27日
- ▽ 北九州市                   "                   10月24日～12月13日
- ▽ 名古屋市 令和3年（2021年）3月16日～4月18日
- ▽ 横浜市                   "                   8月31日～9月21日
- ▽ 横浜市 令和4年（2022年）5月2日～6月12日

これらに先立ち、青年海外協力隊員の訓練所のある長野県駒ヶ根市の市立博物館＝平成30年（2018年）12月1～27日＝、神戸市のJICA関西＝令和元年（2019年）2月14日～3月18日＝でも開催された。どちらも開催の要望を受け、展示品を提供した。神戸市には多数の「波里美知会」会員が駆けつけた。

### 1-8. 古里展そろって実現

静子が生まれ育った長野県松本市の同美術館での「松本からニジェールへ アフリカを描く 谷垣静子展」＝令和5年（2023年）4月5～9日、主催：「実行委」＝の開催に漕ぎつけた。谷垣の出身地の京都府京丹後市峰山町の京丹後文化会館でも「谷垣雄三医師夫妻顕彰展」が開かれたことはすでに触れた。これで、それぞれの古里での企画展が開かれたことになり、待望の目標が実現した。

### 1-9. 信州大学に作品5点寄贈

さらに信州大学による企画展「信州大学卒業生 谷垣雄三の軌跡 ニジェールのドクター・タニと マダム・シズコ」が信大中央図書館を会場に開催された。

令和5年（2023年）6月19日～7月8日の51日間。清澤研道の紹介で、天から降ってきたかのように、突然、実現した。後輩に大きな刺激を与えたと確信すると共に、谷垣夫妻にとっても谷垣の母校での開催は望外の喜びになったに違いないと信じる。

静子が描いた絵画5点＝参照（図3-1～図3-5）

＝の寄贈も実現した。贈呈式が開催期間中の6月27日、会場で行われ、川本から目録が学長・中村宗一郎に手渡され、続いて川本は学長から感謝状を受け取った。

5点は学長室、附属病院、医学部などに飾られた。二人の魂が宿る最適な場所を故国に得た。

### 1-10. 「ア－ラ」の活動シンボルに

また、作品は松本市美術館での「谷垣静子展」の最終日に遺族らに贈られた。

残った約100点、画用紙のデッサン画などの小品を含めると、約150点が閉幕直後、NGO「大阪アジア・アフリカ・ラテンアメリカ（AALA＝ア－ラ＝）連帯委員会」（大阪市中央区玉造）に寄贈された。

大阪AALA連帯委員会役員の事務局を担当する「実行委」会員・西野敏江（昭和38年入学、教育）から、令和4年（2022年）10月、長野県茅野市の蓼科で開かれた波里美知会合宿のミーティングの席上、「静子さんの絵画を全国47都道府県にある連帯委員会事務所に飾りたい」との申し



図1-4 贈呈式で、中村学長（右）に贈呈目録を手渡す川本会長

「信州大学卒業生 谷垣雄三の軌跡」ニジェールのドクター・タニとマダム・シズコ ー企画展についてー

出があった。「実行委」役員会はこの申し出を歓迎し、「アフリカの平和活動のシンボルになれば」と快諾した。

日本AALA連帯委員会は、非同盟諸国と連携し、非核・中立を掲げ、世界の平和を目指して活動を繰り広げている。

山形茂生は寄贈先に赴き、送り届けた1点1点を確認した。これが縁で山形は8月26日、大阪AALA連帯委員会に招かれ、政変のニジェールの現状を知る学習会の講師を務めた。

### 1-1 1. 感想ノートから

「谷垣さんのような方がいたことを日本人として誇らしく思う」

「夫人の熱意に感動しました。本当にすばらしいお二人とその人生。このようなすばらしい二人がいたことを心に留めて生きていきます」

「谷垣医師の情熱と献身、奥様の現地の人々への温かいまなざしが伝わってきました」

「(ニジェールの) 隣国に赴任していたので、風景になつかしさを感じた。女性の鎖骨から胸にかけての描写、夜の色、心を込めて描かれたことがわかる。合掌」

以上、「実行委」が展示会会場に置いた来場者の「感想ノート」から、抜き書きした。どのページを開いても、「感動した」との文字であふれていた。

また、どの会場にも当時、青年海外協力隊員としてニジェールで活動した人が来場し、「実行委」会員の担当者に気軽に声をかけ、感想ノートには「先生、あの時はお世話になりました」との言葉を残している。

令和2年（2020年）9月のJICA横浜の会場に信州大学文理学部にあった学生寮思誠寮の元寮生が来場していたことも感想ノートから知った。

また、ニジェールでウラン鉱を探索していた国際資源会社「IRSA」（イルサ）の元社員も来てくれた。谷垣が単身、ニジェールに渡り、10か月ほどテキタンテスムのIRSAに勤務したことがある。元社員は横浜でレストランを経営していた。そこへニジェールに渡る前の谷垣が「現地の様子を教えて欲しい」と、訪ねてきたことがあったという。

### 1-1 2. 「静子さんやっと会えたね」

感想ノートで驚いたのは松本市美術館での「谷垣静子展」で、静子さんの高校時代の友人が書き残した一文を発見した時だった。

「静子さん、やっと会いにきたよ。頑張ったね。ニジェールの地で谷垣さんと二人で静かにお休みください」

90歳になるというその女性は、名前、住所、電話番号を書き添えていた。すぐに連絡を取った。静子とは、文学好きの仲良し4人組のひとりだったという。「あがたの森文化会館」や母校の蟻高で開かれた展示会に行こうとしたが、足を痛めて行けず、悔やんでいた。

ところが、美術館での展示会を新聞で知り、駆けつけたという。それが「やっと会えたね」との感激の言葉に。

会場真正面には、松本蟻ヶ崎高校同窓会に寄贈した静子の作品「本を読む少女」が飾られていた。

静子はニジェルに渡る前に、松本市へ墓参に訪れ、仲良したちは駅前のレストランで送別会を開いた。また静子の訃報が届くと、偲ぶ会を開いた。その時、ひとりが「静子の展覧会を開いてほしい」と谷垣から手紙で頼まれていたことが話題になった。

しかし、「この年齢ではできない」と誰ということなく、開催をあきらめたという。谷垣が、いかに日本での静子の展覧会の開催を切望していたかを改めて知った。

静子は新制高校になったばかりの蟻高の第3回卒業生。3年生の時に、ほかの高校から転校してきたという。静子を知りたくて同窓会会長をしたこともあるという同級生の家を訪ねた。しかし、「記憶にないお名前です」と言われたのも、今になって納得した。

静子の高校時代の写真や、ニジェルへ渡る時の挨拶状（転居御案内）も渡してくれた。

挨拶状は、「ニジェルの国より要請があり、ニアメ医科大学の外科のスタッフとして、来年1月ニアメに出発することになりました」と始まり、「ニジェルは世界で最も貧しい国の一つで、サハラ南に位置し、国土の大半が砂漠地帯です」と。末尾に転居先の住所、病院名が仏語で書かれていた。

差出人の「谷垣雄三」の脇に「静子」と自筆の文字が並んでいた。厳しい自然環境への旅立ちを決断し、それを承諾するかのようなサインに見えた。

### 1-13. 「医師修行」終了を宣言

転居の挨拶状と言えば、興味深い1枚がある。谷垣が昭和46年（1971年）1月以来、勤務していた埼玉県小川町の小川赤十字病院から5年後の同51年（1976年）7月、津軽海峡を渡り、北海道帯広市の帯広協会病院に勤務することになった。

その時の挨拶状で、「帯広協会病院に外科の修行をはじめることになりました。今までの医師修行のしめくりとしたいと考えています」と、医師修行の終了を宣言している。

その通り、谷垣は医師として一本立ちして北海道を去り、同54年（1979年）4月、ニジェルに単身赴任している。

この挨拶状は、「実行委」会員でもある竹前紀樹（昭和40年入学、医、朝日ながの病院院長）の友人医師が保管していた。竹前は、谷垣の軌跡を知る貴重な資料として写しを友人の許可を得て提供してくれた。

谷垣は大学病院での研修を辞退し、医療の最前線での自主研修の道を選んだ。同赤十字病院で麻酔科、整形外科を修行し、さらに南総病院（千葉県市原市）や保生園病院（東京都東村山市）でも胸部外科などを修行した。挨拶状の書き出しには、指導を仰ぎ、世話になった多数の医師、教授の名前を書き連ねている。

その心底には、「貧しい人たちの医療に尽くす」決意を抱いていたのだろう。アフリカ行きがすでに脳裏にあったかもしれない。支援が得られない孤立した医療環境の中で、どうしてもオールマイティの「総合医」になる必要性があったのだ。



「信州大学卒業生 谷垣雄三の軌跡」ニジェールのドクター・タニとマダム・シズコ ー企画展についてー

となると、医学部を卒業してから、「ニジェールのドクター・タニ」になるまでの準備に10年余もかかったことになる。

竹前は、谷垣の4年後輩。竹前は専門課程で谷垣から「勉強会をやろう」と声を掛けられたことがあるという。

#### 1-14. 最後の帰国は平成23年

谷垣は読売国際協力賞を受賞した平成21年（2009年）に来日し、ワングル仲間は「あがたの森公園」に谷垣を迎えた。

これが最後の帰国かと思われていた。それが2年後の平成23年（2011年）11月に来日し、浅間温泉で開かれた信州大学医学部第13回卒業生の同窓会に出席している。同窓会の幹事だった清澤研道に届いた礼状のはがきを見せてもらい、知った。「温かい松本の言葉を聞き、心がなごみました」と感謝の気持ちを述べ、「同窓会の席を早く立ちましたが、その夜から（略）体が麻痺していく感じがし、顔の帯状疱疹と分かりました」と告白している。このために入院を勧められたが、健康保険証がないため、予定通り成田を出発したという。

『外科医 谷垣雄三物語』（国際開発ジャーナル社刊）を再版する折には、5年にわたるインターン闘争から青医連運動までの資料を提供したい」旨の手紙が届いた。その医師は『谷垣雄三物語』を、所属する医師会の会報に紹介してくれた。

再版の折には、是非これらの情報をいかしたい。

このように反響は尽きない。谷垣は厳しく闘う実行力に満ちあふれた外科医だった反面、誰からも愛された寡黙な「人格者」だった。この思いが胸の中で膨らみ、やがて熱くなった。

## 2章 遺作から読み取れる国際保健医療協力の中での闘い

山形 茂生

谷垣は、自分の実績を自ら日本語で発信することはほとんどしてこなかった。「自分のやっていることはたいしたことではない」と、謙虚を通り越してストイックなまでの姿勢を貫いた。それが理由で、彼は「貧しく劣悪な生活状況に置かれたニジェールの人々に献身的に治療を施している」といった理解が一般的になされていた。間違いではないのだが、ほんの一面の姿に過ぎなかった。

自身の実績を体系的にまとめた文書は、日本語では作っていない。彼はむしろ、途上国の人々に経験を伝えたい思いで、地方外科で試行錯誤した成果をフランス語と英語でまとめている。2007年にニジェールの医療関係者向けにフランス語で書いた「地方外科実践ガイド (Guide Pratique de Chirurgie Rurale)」(以下「地方外科実践ガイド」と記載)、そして、テッサワでの20年にわたる経験の集大成を、ニジェールだけでなく全途上国の関係者に役立てたいと、2010年から英語とフランス語でまとめはじめた、遺作ともいえる「地方外科パイロットセンター活動報告書 (Report on the Activities of a Rural Surgery Improvement Test Center in Niger)」(以下「活動報告書」と記載)がそれだ。後者については毎年更新を続け、最後のものは電子データを見ると、死去の2か月前の更新日付<sup>1</sup>だった。

だが、日本の支援者に対しては、折に触れ活動を報告していた。文字によるものだけでなく、ビデオも自ら撮影し、ナレーションを入れて、分かりやすいよう活動の説明をしている。そのうちの1本に、テッサワでの活動の動機を語っている。

「1985年WHOの総会で援助漬けになっているアフリカの医療に住民負担の原則を導入することが確認された。ニアメ病院で10年間ニジェールでの外科を見てきた谷垣は、地方外科医療の改善を住民負担の原則に基づいて実施するためには準備しなければならないことがあると考え、テッサワにパイロットセンターを設立した。」

### 2-1. アルマアタ宣言とバマコ・イニシャチブ

背景を眺めてみよう。

第二次世界大戦が終結し(1945)、基本的人権としての健康の達成を目指す国連専門機関として世界保健機構(WHO)が生まれ(1948)、植民地から続々と独立国が誕生し(1960ニジェール共和国独立)、WHOを中心に世界で展開された保健活動は、主にいくつかの疾病対策が主だった。その中で画期的な成功例は天然痘根絶であり(1977)、他にトラコーマ(トラホーム)なども、世界で協力して撲滅を進めている疾病の例だ。現在でもコロナのような新興感染症だけでなく、日本ではすでに管理下に置いているポリオや結核でも世界的に疾病対策を続けている。

ところで、アフリカ諸国をはじめとする新興諸国では、政治的には独立を達成したにもかかわらず、世界経済は依然植民地時代の秩序のままで、開発先進国と途上国との間の格差が埋まらないことへの問題意識がくすぶっていた。保健分野でも、平均余命や乳幼児死亡率等の保健指標に

「信州大学卒業生 谷垣雄三の軌跡」ニジェールのドクター・タニとマダム・シズコ ー企画展についてー

圧倒的な格差があること、そして途上国では保健分野に十分な予算を回すことができず、状況の改善のための模索が続いていた。

そういう中で、中国の裸足の医者に代表され、各国で試みられていた地域レベルの保健活動が低コストで効率が高いと評価され、プライマリ・ヘルス・ケアと名付けられて注目を浴びるようになった。そして、当時ソ連邦のアルマアタ（現カザフスタン共和国アルマトイ）でWHOとUNICEFの共同開催により「プライマリ・ヘルス・ケアに関する国際会議<sup>2</sup>」が開かれ（1978）、各国政府、国際機関、非政府組織、保健従事者等全ての関係者がプライマリ・ヘルス・ケアを支援し、技術協力も経済支援もそちらに振り向けるべきとする「2000年までにすべての人々に健康を（health for all）」という宣言を發表した。この宣言では、「健康」が単に疾病から免れている状態にとどまらず、身体的・精神的・社会的に完全に良好な状態であることと定義づけた。

その後10年間、アフリカ各国でもプライマリ・ヘルス・ケア推進が試みられた。しかし資金不足はやはり解決されず、さらに政策立案能力も低く、アルマアタ宣言が掲げた目標を実現していくのは容易でなかった。そこでWHOおよびUNICEFがふたたび支援し、マリ共和国のパマコで解決策を討議した（1987）。そこで討議された内容は、地域コミュニティの政策決定への参加、プライマリ・ヘルス・ケア実施のうえでの地方分権化、サービス利用者による相応の経費負担、といったものだった<sup>3</sup>。

## 2-2. 全国視察旅行の結果

こういった世界の保健政策の展開、援助のうねりの中、谷垣は国際協力専門家としてニジェールに赴任した（1982）。最初の10年間の任地は、首都ニアメ。勤務先は、ニアメ国立病院。そこでたった3名しかいない外科医の1人として、来る日も来る日も人々の外科診療に当たった。休暇で不在となる同僚の代診も進んで引き受けた。日本で博士号を取得してからは、ニアメ大学医学部にも外科教授として迎え入れられ、学生の指導に当たった。

だが谷垣にとり、ニジェールの原点は、ニアメから北東650kmの砂漠にあるテキダンテスム（テギダ・ン・テスム）<sup>4</sup>にあった。JICA専門家として本格的にニジェールに赴任する3年前、彼はサハラ砂漠の中にあるウラン鉱試掘現場に顧問医として勤務した<sup>5</sup>（1979）。求められた任務は、約10名の日本人技師・従業員の健康管理だったが、それだけで満足しなかった。時間の許す限り村の診療所を訪れて村人の怪我・病気を治し<sup>6</sup>、そして村の小学校で30歳年下の子どもたちと交じってフランス語を勉強した。

彼が砂漠での顧問医としての任務に応募した理由は、今のところ正確には分かっていない。資金稼ぎのためだったのだろうか、それとも将来無医村の医者になるための経験蓄積だったのだろうか。どうもそうではない気がする。彼は用意周到な性格の持ち主だ。いずれニジェールか、アフリカのどこかの医者になるという目的意識があった可能性がある。

医学部同期生による文集「途上」の第3号（1966年2月発行）に寄せた『バナナ』という短文に、インドネシアで闘争に参加して病死する医学生の話、その中で「アジア連帯」という言葉を綴っている。激化し始めたベトナム戦争に心を痛めていたということもあるだろう。その頃から海外

に目を向けていたか、あるいは子どもの頃感銘を受けた野口英世の伝記が、頭の片隅に残っていたのかもしれない。

これを書きながら、彼がなぜ外科を選んだのかが気になり、医学部の同期生だった清澤医師（研道、元信大附属病院長）に尋ねてみた。谷垣自身が書いたものには見当たらなかったが、「僻地で、一人で医療を完結させるには必然ではなかったか」という答えだった。清澤によれば、谷垣は計画力、とっさの判断力、決断力で外科医としての資質を備え、かつ緻密に考える「内科的外科医」だったという評価だ。筆者がテッサワから持ち帰って信州大学医学部に寄贈した遺品の中に、1冊のファイルに綴じた日本での外科手術の記録集があり、それも彼の緻密さの証明になるだろう。

砂漠の顧問医の仕事は10カ月で終わりを告げた。帰国した後、東京の病院で外科医として勤務するかたわら、夜はフランス語学校に通い、そして厚生省にニジェールに再赴任できるよう働きかけた。その粘り強さの甲斐あって、ニジェール政府からの要請によりニアメ国立病院に迎え入れられた<sup>7</sup>。

ニアメでは、政府お抱え外国人、しかも国立病院医師として、セレブとしての生活ができただろう。少なくとも年に1回の長期休暇で、一時帰国やヨーロッパ旅行もできた。しかし着任2年後に行った砂漠の集落テキダテスムへの「里帰り」を皮切りに、5年間で7回の砂漠旅行を行っている。外国人向け観光ホテルがある場所はほとんどなく、一般の宿舎に泊ったり、野宿で夜を過ごした写真も残っている。こうして、全国を回って一般住民の医療事情を調べまわった。

その全国旅行の結論が、「地方外科医療の改善を住民負担の原則に基づいて実施するためには準備しなければならないことがある」という言葉となっている。「ニアメ病院で10年間ニジェールでの外科を見てきた」と語っているが、決してニアメだけを見ていたわけではない。テキダテスムの体験から始まって、砂漠を何度も踏破し、村々を訪れ、人々の暮らしをくまなく観察し、隣国マリのバマコまで足を運んだ結果が、テッサワに結実した。

### 2-3. 地方外科実践ガイド

テッサワは、谷垣にとり、頭の中で描き続けてきた計画の実現の第1歩だった。彼の目的は、人々を治すことではなく、人々がいつでもどこでも外科治療を受けることのできる状況を整えることだった。

日本から見ている者にとっては、それは数年、せいぜい10年で終わるものだと予想していた。しかし、テッサワに移ってから（1992）、活動の集大成である地方外科実践ガイドを発表するまで、15年かかった。その間に、最愛の妻、静子を亡くし（1999）、JICA専門家としての契約が終了し<sup>8</sup>（2001）、最初に自費で建設したパイロットセンターは国に接収され（2002）、それでも第二のセンターを建て、自宅の中庭に埋葬した妻に毎朝語りかけ、その隣に自身の墓を用意し、活動を続けた。

谷垣の死去（2017）1年後に、遺品整理のため自宅とパイロットセンターを筆者が訪れた際、2007年に完成し、ニジェール保健大臣を含む保健医療関係者約50名を前に報告した「地方外科実

「信州大学卒業生 谷垣雄三の軌跡」ニジェールのドクター・タニとマダム・シズコ ー企画展についてー

践ガイド」(仏語) 数部を引き取り、静子の絵画と共に日本に持ち帰った。そして信州大学医学部創立75周年記念で講演の機会をいただいた際、1部を医学部に寄贈した。

しかしその数か月後に、少なくとも2種類の版があることに気が付いた。どちらも出版時期は2007年1月である。1種類は、「このプロジェクト評価、あるいは中間レビューの文書は、次の3つの目的を持つ・・・」という序論から始まり、センターの建設工事や設備についての解説も含め、最後の謝辞で終わる、70ページからなる概論的なものである。大学に寄贈したのは、この簡易版だった。そしてあとから気づいたもう1種類は、先の文書のあとに、病院の業務についての留意事項、患者受け入れ手順、診療の準備作業、手術の準備作業、滅菌、器具保守、手術室の資材・薬品、手術室での作業、・・・といった24章からなる「日常業務実践ガイド」が追加された、166ページからなるものだ。

なぜ同じタイトル、同じ出版年月で2種類のものが共存するのか。筆者の想像であるが、70ページのものは2007年4月の報告会の席上で参加者に配られた簡易版、そして166ページのものはそれこそ実践用として作成され、現場関係者に配布されたものではないだろうか。

信大中央図書館での企画展が終了した後、筆者が手元に残していた本格版も大学に寄贈させていただいた。大学図書館所蔵となったおかげで、CiNii (国立情報学研究所学術情報ナビゲータ)を通じて全国で検索可能となっている。

#### 2-4. 活動報告書

活動報告書についても、思いつくままに紹介しよう。

冒頭に、ニジェールで地方外科改善に尽力する決心をした経緯を紹介している。1986年、国賓として訪日した大統領<sup>9</sup>に当時の保健大臣が随行し、天皇陛下に拝謁した時のことだ。天皇の質問に答えて大臣が、村の妊婦が難産に遭い、50km離れた医療施設に牛かロバが引く荷車で運ばれるが、手遅れになるという厳しい保健医療事情を説明し、天皇が感銘を受けて自ら大臣の手を強く握って激励されたという話を帰国後に谷垣に伝え、それが谷垣の決心を固めさせたということだ。すでに全国調査を始めていた谷垣にとり、その光景が即座にかつ鮮明に目に浮かんだことだろう。

パイロットセンターを開設してから18年間の手術件数が1万2千件強、年平均673件と記載されている。土日休日も休まなかったとして、1日2件の手術を毎日こなしたことになる。その内、1999年は629件、2000年977件、2001年900件、2002年から2004年までは年間1000件を超えている。妻の死去、JICA専門家契約終了、最初のセンターの国による接収という逆境を跳ね返した強固な意志が読み取れる。

2007年の地方外科実践ガイド公開前後の事情にも触れている。2006年、保健省はいわゆる「人民プロジェクト」開始を宣言した。全国の保健医療施設35カ所に外科施設を新設し、国の事業として地方外科を開始する、それまでテッサワのパイロットセンターで行ってきた国の支援は終了することになり、国から派遣されたスタッフは引き上げた。センターはいったん閉鎖し、翌年これまでの成果発表ということで実践ガイドを公開し、谷垣は一時帰国した。日本の支援者への報

告が主な目的だったのだろう。だが、ニジェールにすぐ戻った。そして自費でスタッフ8名を雇用し、再開した。

この活動報告書には、ニジェール保健省、谷垣の活動の公的な支援機関である「谷垣医師活動支援協会(APSAYT<sup>10</sup>)」、日本のNPO「アジア・アフリカにおける医学教育支援機構(OMEAAA<sup>11</sup>)」が名を連ね、ニジェール外科医長監修、谷垣雄三著、となっている。2010年から執筆が続けられたが、認可を受けることなく、残念ながら原稿として遺したまま世を去ったのではないだろうか。

彼は、日本のNPOが地方外科改善事業を継続するための基金をニジェールに設立することを期待するという文書を遺している。

## 2-5. SDGs、UHC、グローバル・サージャリー

谷垣が25年間のテッサワ、35年間のニジェールでの活動の末に遺したものの、それはテッサワにあるパイロットセンターから改組したユウゾウ・タニガキ県病院、自宅を改装したマダム・シズコ保健センター、彼が育成したニジェール人外科医、看護師たち、地方外科実践ガイドと活動報告書、そしてそれらの中に詰められた彼の精神である。

その精神が、これまでの各地での展示会を通じて多くの人々に少しでも知っていただけたこと、そして川本の著作や、信大附属図書館に所蔵される谷垣自身の書籍と共に残ることになったのは、当会の活動の成果として喜ばしい。

筆者は、谷垣がテッサワに移って間もなくの時期から2年間、JICAの担当部署に居て彼の活動を見守り、また現場まで足を運んで直接話を聞いた(1993)。その後もたまたまニジェールに関わり、谷垣の最期に当って埋葬に列席したうえ、遺品の整理に携わる役目を授かった。帰国後に、日本でほとんど知られていない彼の業績を少しでも多くの人に知ってもらおうと、企画展を始めとする顕彰活動に参加したが、その活動の中で、自分自身で十分理解しきれていなかった彼の意図や精神、その背景をようやく理解できるようになったのは、思いがけない収穫だった。さらに信大附属図書館に機会を与えていただいたおかげで、筆者なりの結論をこうしてまとめることができたことに、感謝したい。

残念ながら、地方外科実践ガイドや、活動報告書が、ニジェールでも他の開発途上国でも使われているという様子はない。あのようなきめの細かい対策を実践しようとする外科医はほとんどいず、また外科医にとり先端技術や専用の用具を使うことに重きを置き、谷垣が提案した地道な工夫に目を向けないというのが、理由ではないだろうか。

だが彼の思想は、2015年に始まったSDGs(持続可能な開発目標)の目標3「すべての人に健康と福祉を」の中の、ターゲット3.8「ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(UHC)の達成」に通じていたと、展示会に来訪した専門家からアドバイスをいただき、当会の活動を続けるモチベーションと勇気もらった。さらに、国際保健医療協力の世界では後回しになっていた外科分野で、途上国に対し体系的な外科指導・教育を継続的に行うグローバル・サージャリー<sup>12</sup>の運動が始まっていることも知り、人は変わるが、谷垣の闘いの精神は残り続けるだろうと信じている。

「信州大学卒業生 谷垣雄三の軌跡」ニジェールのドクター・タニとマダム・シズコ ー企画展についてー

### 3章 谷垣雄三の軌跡に寄り添った絵画たち

安城 康平

#### 3-1. 松本からニジェールへ、愛と夢と共に生きた静子さん

松本市の医学書専門店「明倫堂」に勤めていた静子、そこに通っていたのは信州大学医学生の谷垣雄三、成績優秀なれど社会の矛盾に目をつぶることができず、医学部闘争のリーダーとなり、医師試験のボイコットも辞さない学生であった。9歳年上の静子は、そんな谷垣の承認欲求に応え、優しい愛だけで包み込み、純粋なまでの夢みがちな前向きの話をしたのではないだろうか、「医者になれる人は多くはいない、あなたのようなドクターがいないことには、無医の町も村も変わらないわ」などと言ったに違いない。

その後、谷垣は静子を猛烈に説き伏せて結婚することになる。ただこの結婚へ静子の家族は反対し、谷垣の友人をも巻き込んで、谷垣に結婚をあきらめるよう友人から言い聞かせてほしいと懇願したほどであった。

谷垣雄三という人は、そんなことで心変わりのする人ではない。さっさと結婚し、医師免許を取得。その後は日本各地で医師技術の修業を重ね、1979年には医事定期刊行物でアフリカ在住顧問医の求人に応募して、単身でニジェールに渡り約10ヶ月間、砂漠の村で日本企業の人だけでなく現地の人々の診療にも当たった。帰国後はさらにフランス語を学び、1982年1月にはアフリカ、ニジェールの国立病院に医療の長期技術協力専門家として静子と共に赴任する（前章2-2. 参照）。

夫の海外赴任に同行する静子にとって、初めてのアフリカ、飛行機の中でまたトランジットの空港で、どんな思いであっただろうか、谷垣への「愛」だけを信じて故郷松本を後にして、夫の夢と共に生きる決意の方がはるかに大きかったと言わざるを得ない。

私が谷垣静子とお会いしたのは、1986年の12月中頃、青年海外協力隊の調整員として家族と共にニジェールへ赴任した時であった。到着して2日ほどで空き家が見つかり、その家に移った翌日の朝、静子は雄三と共に朝食を持ってきてくれた。バゲットと卵焼きに加え、梅干し入りの海苔おにぎりもあり、子供たちが喜んで食べた。子供たちもこの朝食をきっかけによく食べるようになり、ホッとしたのを記憶している。

その時、谷垣夫妻は既にニアメで5年目を迎えており、生活情報もいろいろと教えていただいた。寡黙な雄三に比べて、静子は屈託なく話しかけてくれ、雄三を「雄ちゃん」と呼ぶのを耳にし、雄三も「静ちゃん」と応えている様子を見ながら、映画のシーンを見ている様な不思議な感覚にとらわれたことも記憶している。その後静子が絵を描いていると知って間もなく、文化活動を盛んに展開していた在ニジェールフランス文化センターを訪れた際に、静子の絵が話題となり、センターでの個展の話まで進んだ際、雄三は「素人が趣味でやっている事だから・・・」と躊躇する中、「センターは素人優先なんです」と説き伏せ、センターでの個展開催のお手伝いをした。

我々は2年余りの契約後に帰国するが、その頃、谷垣夫妻は首都ニアメからテッサワへと移っている。帰国後は日本から本を送るなど連絡を取り合っていたものの、しばらくして静子の筆跡は弱々しくなり、雄三から静子の亡くなった知らせが届いた。雄三はその後もニジェールで自身の使命である「地方医療の改善」に取り組み、“シチズン・オブ・ザ・イヤ－賞” はじめ“読売

国際協力賞”等多数の表彰を受け、2017年3月7日にテッサワで亡くなる。遺体は本人の遺志により静子の横に埋葬された。二人の、精神の強さと人間に対する隔たりない思いはお見事というほかない。

### 3-2. 帰国した絵画たち

雄三が亡くなった時、JICA（国際協力機構）のニジェール支所長は山形茂生であった。このことには運命的なものを感じる。アフリカにも深い思いを抱く彼であったからこそ、雄三の成果と遺産をアフリカのために役立て、そして多くの人にも知って欲しいと考えての行動をとったに違いない。そして山形は遺品の中からフランス文化センターで開催された個展のビデオテープを見つけ、これを手掛かりに撮影者である私に連絡をくれた。静子に差し上げたビデオテープとの再会に驚きながらも、山形から、谷垣夫妻の活動を顕彰する「実行委」の設立と活動の内容を知らされ、そのためのボランティアに加わることになった。

「実行委」のメンバーは信州大学ワンダーフォーゲル部仲間が中心となり、谷垣の親族からニジェールに残された静子の作品を含む資料等が受け渡された。

「実行委」は日本各地での企画展を開催し、2023年4月には松本市美術館で「谷垣静子展」を開催。静子を知る多くの方々が彼女の絵で静子と再会することができた。

### 3-3. 企画展に絵画の展示

谷垣雄三の軌跡を紹介する企画展では、当初から静子夫人の絵画も展示された。それは第一に雄三自身の最期の願いであり、その絵画展の願いを叶えたいとの理由もあった。しかし結果的に、絵画は谷垣医師の活動紹介に寄り添うような「場」の雰囲気醸し出し、異なる環境と文化そして生き活きた人々の姿を分かりやすい絵画で紹介することになっていた。そして企画展を重ねる毎に、自分自身は、これらの絵画が雄三の活動を支え続けたと考えるようになり、確信へとつながっていった。絵を描いた静子の視線、そして彼女が一度だけ言った、「ニジェールだからといい加減なことをしないでね」の言葉を思い起しながら、静子が絵画を描いていた時と同じような視線で、雄三も人々と接しながら医療を続けることができたと思われる。

当初、自分自身は雄三の『静子の絵の展覧会を日本で・・・』という最期の願いは、故郷松本の地を踏むことなくニジェールで病に倒れ亡くなったことへの雄三の自責の念かと考えていた。しかし企画展の回を重ねるごとに、静子の絵が語りかけているようにも感じられ、作者の人を見るまなざしを通して、自然や社会の問題とそれらの環境の中で息づく生命を見出し、これらの絵画の本質に気づき始めていた。雄三も、同じような思いが重なり、生前の静子との会話を思い起こすと共に、絵画の本質が見え始め、純粹に「絵の伝えるところのものを見てもらいたい」と思うようになったのではないだろうか。彼自身は、ともすると地方医療の問題の取り組みが遅々として成果につながらない苦境の中、彼女の残した絵画の本質の価値に気づき、これらの絵画に支えられ、彼自身も初心を思い起こしながら困難を乗り越えたのではないだろうか。彼女が亡くなったあと18年もの間、絵画は雄三を見守っていた。雄三が素人の趣味と見ていた絵画を、彼自身の



「信州大学卒業生 谷垣雄三の軌跡」ニジェールのドクター・タニとマダム・シズコ ー企画展についてー

医療活動に勝るとも劣らない成果と認め、これらの絵の素晴らしさを見出した故に、絵の展覧会を望んだのではないだろうか。私自身もそんな風に考えるようになっていく。

### 3-4. 寄贈絵画が語りかけるもの

「谷垣雄三・静子夫妻記念事業実行委員会」からは企画展「谷垣雄三の軌跡」で使用された資料と以下の絵画5点が信州大学に寄贈された。

これらの絵画は、各々がストーリーを持っている。自身の経験では、見るごとに奥深く入り込むことができ、語りかけを聴くこともできるようになった。その土地の環境と文化を知ることに見えるものが異なっていくのはもちろんであるが、描かれた人は何をしているのか、また人々はどうのような関係にあるのか疑問を抱くたびに、表情だけでない手のしぐさや足の様子、そして全身のバランスなどから思い描くことができ、それらが語りかけてもくる。見る人の視点により異なるストーリーを紡ぐこともできそうな興味深い絵画である。



図3-1 モスクの見えるテラス／アガデス  
油彩、41 ㍍×32 ㍍

#### 「モスクの見えるテラス／アガデス」

場所は砂漠の入り口の町アガデスで、ホテルのテラスから通りを挟んでモスクが見える。朝昼夕の礼拝への呼びかけ（アザーン）も聞こえてきそう。暑い日差しの中、テーブルの上の鉢植えを見る女性は鉢植えの植木と自身の生きる様にどれほどの違いがあるか、などと考えながら見ているのではないだろうか。誰かの水を抛り所に活かされている植木であり、与えられた厳しい環境と条件の中で強く生き続ける植木でもある。

#### 「グランドモスク」

「グランドモスク」は、首都ニアメにある一番大きいモスク（イスラム寺院）である。ニジェールの人々は教えを守り、ラマダン（断食）も行う。静子はこのほかにも数枚のグランドモスクを描いている。自宅からは離れたイスラム寺院であるが度々訪れていた。アザーンは異教の旋律ながら、人に共通する平和を求め、和みの音になっていたのかもしれない。



図3-2 グランドモスク  
油彩、32 ㍍×40 ㍍



図3-3 トアレグキャンプ  
油彩. 92 ㍉×117 ㍉

### 「トアレグキャンプ」

「トアレグキャンプ」は興味深い絵である。静子はこの絵に長い時間をかけて仕上げていた。当初は犬がいなかったことや現地で描いたデッサンと油彩は立ち位置が異なることから、登場人物の配置とバランスに工夫を凝らしたことが分かる。また登場人物の配置はピカソの「人生（ラ・ヴィ）」を彷彿させ、これだけでも想像力を刺激する絵になっている。登場人物の足の描き方も興味深い、各々の身体の安定感が内面的な心情までも見せてくれ、単純ではない人と生きる様がドラマのように展開されている。

### 「花瓶@リスボン」

旅先でも、ホテルの部屋には花を活けて過ごしたそうだ。

「なぜか、まがった花があったの」

静子は曲がった花を旅先で見つけたことを嬉しそうに語っていた。茎の曲がった花、まっすぐに伸びるはずだった茎の花、予想もしなかった不確実性に自身を重ねていたのか、人間の不確実性への動揺と熱愛が同居している。もちろん、旅先の少し湿った空気の中で花と向き合う時間、それは砂漠で暮らす静子にとっての貴重な時間でもあったようだ。



図3-4 花瓶@リスボン  
水彩. 46 ㍉×38 ㍉



図3-5 凭れかかる女性「休息」  
油彩. 58 ㍉×70 ㍉

### 「凭れかかる女性『休息』」

このモチーフの『休息』に至るまでには少なくとも3枚以上の習作がある。最初は腕を台に置き瞑想する裸婦に始まり、次は同じような構図で女性の左には深い溝があり何かと対峙している。その次には最後のポーズとほぼ同じであるが、やはり腕は台に置いている。そして最後の『休息』でも当初は腕を台に置いていたものの、台の上に絵の具を重ねて、緩やかな土手と草花に変えた形跡がある。しかしながらこれらの絵の具は剥がれて台が現れている。キャンバスを丸めて保存していたことも剥離の進行を多くしたと思われるが、「実行委」ではこの絵の修復を

「信州大学卒業生 谷垣雄三の軌跡」ニジェールのドクター・タニとマダム・シズコ ー企画展についてー

専門家に依頼した。修復は、絵の具の剥離が進行していたことから、現状を保ち剥離がこれ以上進まないような特殊なニス塗布とキャンバスの補強を行った。絵画は剥離を見せる形式の修復を行い、作者が最後に描いたであろう剥離箇所の絵の具による追加修復は行っていない。そのことで、この絵は作家の考えがどのように変化したのか、また何を描きどのように変えようとしたのか、想像することができ、ニジェールでの静子との時間を共有できる作品になっている。絵の具は多く剥がれているものの、それがゆえにむしろ興味深さも絵の重厚さと意味もが高まっている作品である。

描かれた女性の表情からは、自然・環境に寄り添った生き方により、悩みも対峙するものもない『休息』を得ることができる。そんな境地に到達したと思わせる安らぎが感じられる。見る人によっては違うストーリーになることもある。想像力が刺激される絵である。

もちろん、これらの絵は絵画の審美性や絵画の地域的背景や歴史等の視点からも楽しむことができるが、「いつ、どこで描かれたのだろうか?」、「どんな音が聞こえているのだろうか?」と思いはじめた瞬間から、絵に入り込むことができ、興味深い絵に変身していく。もちろん『ニジェールのドクター・タニ外科医谷垣雄三物語<sup>13</sup>』が格好のガイドであることは間違いない。

### 3-5. 絵画の価値と意味

絵画の価値について、その絵画の審美性を重要視したのはカントだそうだが、3~4年前NHK放送大学の青山昌文<sup>14</sup>先生は、ディドロ<sup>15</sup>の美術批評を『芸術史と芸術理論』の中で紹介し、「関心の美学」という、強烈に関心を掻き立てる力・エネルギーを持っていることこそが、芸術作品の本来的な根本性格と論じている。一方、絵画の価値は愛（思い）が感じられるか否かともいわれていたのを思い出す。ゴッホの絵を見て、絵画の価値は一層分からなくなるが、絵画をビジネスにしている人にとっては 希少性や知名度に加えて需要と供給が関係しているといわれている。そして最近ではAIの描く絵も出現して、絵画の価値も時代と共に変化していくように思われる。そんな中で静子の絵はAIとは程遠く、実在する地域性を持った現実と背景が存在し、そこに谷垣静子という松本の文化に育まれた夢みがちで愛にあふれた思いが加わった、興味深い絵画に仕上がっている。AIには到底できそうもない人間味あふれた作品である。これらの絵画が信州大学に辿りついたこともこの絵の持つ愛の力と評価したい。はるか遠いニジェールのテッサワから松本に辿りついたこれらの絵画が松本で世代を超えた対話を交わすことは、グローバルな意識と知識を刺激するのみならず、普遍的な人間愛を語ることに他ならない。まさにディドロのいう「強烈に関心を掻き立てる」絵画により、文化・芸術や医学などの学際的な枠も国際的な枠をも超えた、人間愛とアートの融合がこの地、松本に芽吹いていることの証となる作品であり、更なる進展につなげるためにこの地に戻った稀有な作品といえる。

---

 注

- 1 英語版2017年1月2日、仏語版2017年1月13日。
- 2 The International Conference on Primary Health Care, Alma-Ata, USSR, 6-12 September 1978
- 3 Bamako Initiative
- 4 Tegguida In Tessoum, Teguida n' Tessoum
- 5 国際資源(株) (IRSA)。アラビア石油(株)等が出資した。
- 6 「砂漠の国ニジェール」という手書きの紀行文が遺っている。
- 7 JICAの技術協力専門家は、開発途上国政府が日本政府に対し外交ルートで要請を出し、派遣が実現する。
- 8 JICA専門家の派遣期間は通常2年間、その後先方政府から外交ルートで延長要請が出て、1～2年ずつ延長される。
- 9 正確には最高軍事評議会議長、セイニ・クンチェ (Seyni Kountché、在任1974-87)。
- 10 Association Pour Soutenir les Activités du Docteur Yuzo Tanigaki。1991年5月21日付ニジェール内務省令により設立認可。
- 11 熊谷義也理事長。
- 12 MDGs終了を控えて世銀総裁の呼びかけ (2014) に応じ設立された「グローバル・サージャリーに関するランセット委員会 (The Lancet Commission on Global Surgery)」が、「Global Surgery 2030: evidence and solutions for achieving health, welfare, and economic development」という報告書を発表した (2015)。
- 13 川本晴夫 (2022) 「ニジェールのドクター・タニ外科医谷垣雄三物語」国際開発ジャーナル社
- 14 青山昌文、放送大学 人間と文化コース 教授
- 15 ドゥニ・ディドロ (Denis Diderot、1713-1784年) フランスの哲学者、美術批評家、作家

## 参考文献

- 川本晴夫 (2022) 「ニジェールのドクター・タニ外科医谷垣雄三物語」国際開発ジャーナル社
- 青山昌文 (2013) 「芸術史と芸術理論」－芸術の深く豊かな意味－ (NHK放送大学資料)  
p. 196